令和7年11月10日付【水道産業新聞】
中国・四国支部＜管路築造工法や新管種など説明＞
技術講習会で3講演

技術講習会で3講演

水コン協中国・四国支部 管路築造工法や新管種など説明

全国上下水道コンサルタント協会中国・四国支部はさきごろ、技術講習会を広島市内の会場（中電技術コンサルタント）とオンライン配信で開催した。今年度は企業3社が管路築造工法や新管種の概要、維持管理の取り組みなどを講演した。

渡辺副支部長

室氏

加藤氏

松本氏

冒頭、渡辺修士・同支部副支部長（中電技術コンサルタント執行役員）が「本日の知見を共有して知識向上や日々の業務の参考に」とあいさつ。

室秀臣・DXR工法研究会広報担当（クボタ建設広島営業課担当課長）は「水道管におけるシールド工法の概要および施工事例」と題して講演した。室氏は急曲線が数カ所ある狭い道路に、さや管トンネル（φ1000～2000）を非開削で構築し、トンネル内にダクタイル鉄管（φ700～1500）を布設するシールド工法について、布設手順などを詳説。DXR工法は従来シールド工法に比べて、掘削断面や中込め量を大幅に削減でき、「多様な土質に対応し、安全かつ確実な施工が実現できる」とまとめた。

強化プラスチック複合管（強プラ管）協会の加藤雅治氏（積水化学工業管材グループ課長）の講演「JSWAS K-2強化プラスチック複合管のご紹介」では、浸水発生状況の考慮や地区ごとに最適化された目標水準などを踏まえ、雨水用途に特化し、薄肉化などを図った強プラ管の雨水3種管が、2023年4月に規格化されたと説明。加藤氏は、強プラ管はレベル2地震動でも耐震性能を有し、強酸性環境下でも50年使用可能で、管路更生（さや管工法）やシールド二次覆工にも内挿用強プラ管の採用が増えており、浅深埋設にも対応可能と強調した。

松本卓也・水みらい広島営業部サブリーダーは「維持管理目線で考えるウォーターPPP」として、同社とウォーターPPP（W-PPP）の概要を紹介しながら、W-PPPを導入しないと2027年度以降の汚水管改築に係る国庫補助が受けられなくなるため、2027年度当初予算の交付金を受けるには、2026年までに交付金要件の充足が必要と紹介。ただ、コンサルタント数に対し、W-PPPの対象案件が多い上、地元企業への配慮なども不可欠とし、「W-PPPの維持管理企業は事業者の視点に立つとともに、新たな枠組みの最適解を見つけていくことが重要」と指摘した。